

e-dream-s通信

e-dream-s ホームページ <http://www.e-dream-s.org>

教育用フォトアーカイブ @aglance <http://www.aglance.org>

No.31 発行：2003年 2月9日 特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

目次

1. オンデマンド日本写真アーカイブズ 辻莊一 p1
2. コレクティブ・ハウジング：あるいは、老後の暮らし 井川好二 p3
3. 今月は「永太郎納豆」 中川房代 p8
4. カメルーン教育事情（その1） 山田昌子 p10
5. カメルーンの学生と e メール交流しませんか 山田昌子 p14

オンデマンド日本写真アーカイブズ

ON DEMAND JAPANESE PHOTO ARCHIVES

辻 莊一

@aglance の新プロジェクトとして、オンデマンド日本写真アーカイブズを下記の要領で立ち上げます。

名称 オンデマンド日本写真アーカイブズ

(ON DEMAND JAPANESE PHOTO ARCHIVES)

目的 おもに海外での外国語としての日本語教育および日本文化研究に貢献する

対象 おもに海外の日本語学習者・日本語教師・日本文化研究者および日本・日本文化に興味のある人々

現在、@aglance は教育用海外写真サイトとして約3800枚の画像を掲載し、ますます充実してきています。画像の掲載方針は、多文化理解を主目的としてあらゆる分野の画像を出るだけ多く掲載する、というものです。これだけの画像を丁寧な解説付きで掲載しているサイトはおそらく世界唯一だと思われます。

一方オンデマンド日本写真アーカイブズは、対象を海外の日本語学習者、日本語教師、日本文化研究者などに絞り、画像数よりも必要度の高い画像を掲載することを運営方針とします。そのために、対象者からリクエストを募り、要望のあった写真を出来るだけ短期間(1週間が目標です)に掲載します。言語は英語を主として日本語は補助的に使用します。もちろん画像の解説は日英両言語のバイリンガルです。

オンデマンド日本写真アーカイブズに掲載されるのは大部分がリクエストされた画像ですから、その画像は必要度が高くほぼ100%利用されるという事になります。また使用言語が英語ですから利用者が全世界に広がります。

掲載までの流れは次のようになります。

- 1 サイト内の申し込みフォームに記入、送信
- 2 申し込み審査
- 3a 審査不合格 その旨通知
- 3b 審査合格 受付済みリストに掲載
- 4 写真の手配
- 5 撮影者がコメント付きで日本語キャプション担当(未定)まで送付
- 6 キャプション担当がチェック
- 7 英語キャプション制作(担当者未定)
- 8 ウェブマスターが掲載

まもなくテスト運用を開始しますが、皆さんにお願いがあります。

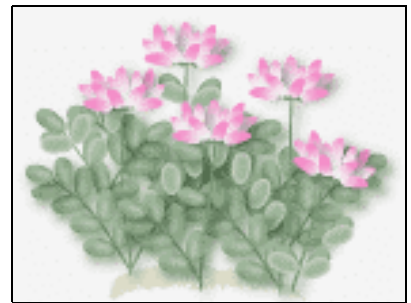
- 1 テスト運用の開始後、海外で日本語を学んでいる、教えている、日本文化に興味がある友人にお願いして、オンデマンド日本写真アーカイブズから申し込んでもらってください。
- 2 写真の撮影をお願いすることがあるかもしれません。そのときはよろしくお願いします。
- 3 写真撮影に協力していただける外部団体(写真部、写真同好会など)を探しています。

4 日本語キャプション担当と英語キャプション担当を募集しています。

オンデマンド日本写真は2003年4月正式に運営を開始します。海外写真とオンデマンド日本写真の両輪でますます充実していく@aglanceを今後ともよろしくお願ひします。

サイトの試作は下記アドレスで見ることができます。

<http://www.aglance.org/sample/>



e-dream-s.come.true

コレクティブ・ハウジング：

あるいは、老後の暮らし

井川 好二

麻布十番の地下鉄の駅から、小春日和の桜田通りを、白金方面に歩く。ちょっと厳つい構えの「韓国文化院」の近くにあるお気に入りのレストランテ。11時半のランチ開店と同時に入れば、2階のパティオ¹に面した明るいテーブルに案内される。例年よりもずっと寒く雪が多

¹ スペイン風中庭, パティオ (inner court); パティオ《庭の家寄りに食事・喫茶などのできるようにしたテラス》[リーダーズ+プラスV2]

かったこの冬の東京。今日は珍しく日差しが暖かい、一月の終わり。

イタリア人のウェイターが注文を取りにくる。アンティパスト²は、牛肉のカルパッチョ³。メインは、チキンの香草焼き。やっぱり、ワインは、キャンティ・クラシコ・リセルヴァ⁴。しかし、昼間からフル・ボトルと云う訳にもいかず、グラスで我慢する。

「最近、忙しくて忙しくて。もう、精神的におかしくなりそうだったの、去年の秋あたり」

「ストレスやね」

「そう。で、急に休んじゃえって思って、シドニーへ一週間行っちゃった」

「ほう」

「良かったわよ。のんびりして」

「シドニーはええ街や」

「そう。あたし、引退したら、シドニーに住もうかしら」

話し相手は、東京の友人。アメリカ暮らし10年で帰国し、今は外資系企業相手のCPA⁵をやっていて、凄腕の会計士と云われている。一方、週末には、プロのジャズ歌手として、六本木界隈のクラブに出演している。しかし、こっちの方の腕前は、大きな声では云えないが、プロとは云いながら、イマイチ。まあ、ハスキーな歌声がそれなり、とも思えるが。

「そんなら、グループ・ホーム⁶はどうや？」

² 【イタリア料理】 前菜 (appetizer). [リーダーズ+プラスV2]

³ カルパッチョ 《生の牛肉をスライスしてソースをかけた料理》 [リーダーズ+プラスV2]

⁴ n. キアンティ クラシコ リセルヴァ 《イタリア中部 Tuscany 州 Firenze 県と Siena 県で生産される保証付き原産地統制呼称ワイン (DOCG) で、キアンティの名で総称されるうちの最上品; 特に DOCG になってから白ブドウの使用率が 2% に減らされ、Sangiovese 種を主体に Canaiolo (イタリア中部 Viterbo 地方の甘い黒ブドウ) 種を補助に用いた、黒ブドウのみの赤ワインとなっている [リーダーズ+プラスV2]

⁵ certified public accountant 公認会計士 《略 CPA》 [リーダーズ+プラスV2]

⁶ ◆グループホーム (group home) [高齢社会・介護] ももとはスウェーデンで、痴呆高齢者や障害者にとって少人数で自宅に近い環境で暮らすことが介護によいとされたことから広がり、欧米で広く定着しているが、日本でも在宅老人福祉対策事業の一環であり、痴呆対応型老人共同生活援助事業として取り入れられた。障害をもつ人にとっては、各自が独立した居室をもつと同時に、共同の居間や食堂で家庭的な雰囲気を楽しむことができ、かつできるだけ家事作業に参加することによって、本人の残存能力を維持することにも効果があるとされている。痴呆性老人のグループホームでの介護は介護保険の対象となる。近年住民から「迷惑施設」とみられ、建設反対にあうホームが相次いでおり大きな問題となっている。また、最近では「元気な高齢者が、少人数の気の合う仲間と老後を一緒に暮らす、ついのすみか」というイメージでグループホームという言葉が使われることが多くなってきた。呼称はグループハウス、グループリビング、コレクティブハウジングなどさまざまあるが、どれも同じような理念をもつ。自分たちの手でグループホーム

「グループ・ホームって？」

「引退した老人たちが、気の合うもん同士一緒に住む老人ホームみたいなもんや」

「へーえ」

「どこか、人件費の安い外国の、安全で景色がきれいでのんびり暮らせるところに、大きな家建てて、バリア・フリー⁷にして、一緒に住めたら、楽しいやろな、て思うねん」

「ふーん。面白そうね」

「最近、『コレクティブ・ハウジング』とも、云うらしい、略してCHや」

e-dream-sの事業として、このCH、コレクティブ・ハウジングを考えるべきである。現在の会員の中から、将来こうした施設を必要とする人が出てくるばかりか、今、会員でなくても、コレクティブ・ハウジングでの老後を望む日本人は数多く、こうしたサービスを受けたい潜在会員は、無数にいることだろう。e-dream-sが、今から手掛けるのに、格好のプロジェクトと云える。

老後は、子供や孫の世話になりたくないと思っている日本人が増えている。子供や孫のいない日本人も増えている。気の置けない仲間と一緒に暮らして、専従の介護士や看護婦がいれば、ハッピーな老人生活になるだろうと思う日本人は多い。

もちろん、老後は日本で暮らしたいと思う人も多だろう。しかし、現在の特別養護老人ホームの実態を見れば、がっかりするばかりで、こっちが入居するまでに、思うようなサービスが提供されるようになっていとも想像しにくい。それに、現在の入居キャンセル待ちの状態が、この10年くらいで解消されるとも、考えにくい。それなら、自前で納得のいく施設をと思うのだが、不動産高、物価高、人件費高の日本国内では思うようなホームの建設・運営は覚束無い。やはり、海外に眼を向けざるを得ないのである。

をつくろうと多くの市民団体が自主勉強会などを開いている。[現代用語の基礎知識2002年版]

⁷◆バリアフリー住宅(barrier free house)〔住生活〕高齢者に限らず足腰が弱く、高低差のある通路や階段昇降が障害となる人々や車椅子を使っている人、また視力の弱い人などには狭い通路や便所や浴室は通りにくい。小さな段差や滑りやすい床は危険となり、廊下や階段には手すりが必要となってくる。こうした老人や身障者と健常者の間の障害・障壁を取り払うような住宅がバリアフリー住宅である。年をとってからそのような住宅に改造することも考えられているが、建てる時分からそういった住宅にすることも大切だといえる。すでにスウェーデンやイタリアでは制度化されている。こうした住宅を作るには改造するにしても新築にしても、最近では公庫や銀行で融資してくれる制度がある。[現代用語の基礎知識2002年版]

「けど、この『コレクティブ・ハウジング事業』は、三位一体⁸でなかったら、アカンと思
てる」

「エエ？それ、どう云う意味？」

「つまりやね、グループ・ホームの運営だけじゃなくて、その土地で日本人相手のヴィラと、
現地人相手の日本語学校を、同時に経営するんや。その三つを有機的に結びつけて、始め
て上手く行く企画やと思う。つまり、三位一体やね」

例えば、チェンマイの郊外に、e-dream-s が建設した集合住宅に、日本人の年寄り 20 人が
住みはじめても、周りのタイ人たちと何のつながりも持たずに、暮らしていくのは、いか
がなものか。それなら、いっそのこと、海外教育プロジェクトも並行して実施する。チェン
マイ市内に日本語学校を開設し、コレクティブ・ハウジング入居者は、そこでボランティア
で教える。地元との繋がりも緊密になるし、地域貢献もできる。

「80になっても、教えてたいな。車椅子乗ってても、週一回は教壇に立ちたい」

「そうか。井川さん、先生だったもんね」

『『だった』はないやろ。まだ現役や」

「でも、生徒は迷惑かもね」

「あんな、こう見えても、自信あんなんけど！」

「はい、はい」

医療の発達と公衆衛生・栄養学の普及により、人間は長生きになった。コレクティブ・ハウ
ジングの入居者の中には、百歳まで生きる人が出てくるかもしれない。そうなって見れば、
引退前の貯えや、先行きどうなるか分からない年金のみを、アテにすることはできない。だ
から、コレクティブ・ハウジングに併設あるいは、その近所で、日本人向けリゾート・ヴィ
ラを経営するのである。ちなみに、リゾート・ヴィラとは、一週間からの中長期の滞在型、
食事付き別荘のことである。

そのヴィラから上がった収益を、コレクティブ・ハウジングの運営に廻す。それに、シェフ
やバトラーなどの人的資源や、庭、建物、プールなどの施設、情報インフラなどの資源を共
有することができる。入居者を訪ねてきた家族や友人の宿舎としても使える。

⁸三つの要素が互いに結びついていて、本質においては一つであること。3者が協力して一体にな
ること。[広辞苑第五版図版付き]

むろん、このヴィラの顧客は日本人に限ることはない。部屋のつくりや装飾、食事や食器、サービスの中身など、ローカルな原料を基本に、日本風のテイストをブレンドするので、そう云うソフィスティケイティドな風合に、魅力を感じるグローバル人に、お薦めのヴィラにしたいものである。

「あら、そういうこと。良い考えね」

「当たり前や。今、CHの候補地として、3か所考えてるんやけど」

「どこ？」

「タイのチェンマイ、ニュージーランドのオークランド、インドネシアのバリ島」

「良いところばかりね」

3か所とも、気候が温暖で、景色が良く、物価や人件費が安く、日本語を学びたい人が多く、政情が比較的安定している。バリ島では最近テロ事件が発生したが、早晚落ち着いてくると思われる。差があるのは、チェンマイ、バリはアジア圏、オークランドは英語圏。チェンマイは仏教、バリはヒンズー、オークランドはプロテスタント。現地の食事にもむろん違いはある。後は、現地の土地価格、建設費用、人件費、物価、医療体制などをチェックして、絞り込んでいくのが良いだろう。むろん、現地の協力者の存在有無も忘れてはならない。

とは云え、このCHプロジェクトが軌道に乗れば、海外に一か所、20名限定と云うのでは、間にあわず、結局、上記三か所全てで開設し、入居者は各施設間の移動が可能と云うのも、面白いかもしれない。

「どこがええ？」

「そうね。言葉のことを考えれば、オークランドだけど・・・」

「なるほど」

「でも、あたし、最近、アジアアン・テイストが癒し系で良いなって思ってるのよね」

「ふーん」

「だから、チェンマイかな？」

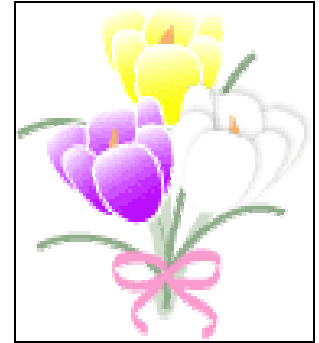
「ほう」

「CHのパンフレット、出来たらすぐ送って」

「了解」

「あたし独身でしょ。お金なんか、貯めてもどうなるもんでもないって、今まで思ってたけど、ちょっと、貯める目的ができたかな」

いつものように、エスプレッソにレモン・ピールが運ばれて、ワインの酔いが少し醒める。そろそろ仕事に戻る時間である。忙しい日常の中でも、夢を語る時間は必要である。未来に備える余裕が必要である。(Saturday, February 8, 2003)



今月は「永太郎納豆」

中川 房代

私の毎日の朝食は、ご飯と納豆、に決めている。関東圏の生まれだが、納豆が嫌いな家庭に育ったため、食べる習慣がなかった。1年前、友人に勧められて食べてみたら結構いけたので、食べることに決めた。その後、いろんなメーカーの納豆を買って食べ比べたり、何と食べ合わせたら美味しいかとか試してみたりもした。道具も、納豆用に開発された特別の「納豆小鉢」と「納豆箸」も揃え、毎朝しっかり使っている。実は、納豆にはちょっとこだわっている私である。

そんな私の最近の買い物は、某K通販会社の「納豆頒布会」⁹。「全国納豆鑑評会」¹⁰で日本一や入賞となった納豆5種類が、5ヶ月にわたって届くというものである。因みに、この鑑評会は、納豆メーカーが参加する日本唯一の納豆コンクールだそう。しかし、この「納豆頒布会」、お安くはない。およそ100食分で13,000円。単純計算でも1食分で130円。スーパーで普通に売っている納豆は3パックとか4パックで100円くらいだから、3倍か4倍の値

⁹ 「通販生活 2002 冬号」(発行:カタログハウス)の「納豆頒布会」

¹⁰ 詳しくは、日本納豆情報PRセンター・全国納豆協同組合連合会公式サイト参照
<http://www.natto.ne.jp/>

段である。それでも買ってしまったのには、訳がある。キャッチコピーに惹かれたからである。

「日本一の納豆、ってどのくらい旨いんだろう。」

「これを食べずして、きみ、納豆を語るなかれ。」

「手間暇かけて作り大量生産できないため、限定 2,500 人限り」

これには、そそられた。もう、注文するしかない！

全国に、納豆にこだわる人間がどのくらいいるかは知らない。でもこれは「納豆好き」「納豆こだわり人間」にはたまらない企画である。反面、納豆を食べない人には、何の関心もないものでもある。

通販の話題をもう 1 つ。

何年か前に利用した通販で、もうなくなってしまっても残念な企画がある。某 F 通販会社¹¹の「左利きグッズ」の通販である。右利きの多い社会の中ではマイノリティである左利き。普段の生活や道具に不便さを感じながらも、仕方がないと諦めていることが多かったりする。そんな私のような人間に朗報。左利きの人向けの包丁や財布、はさみなどの商品が！嬉しくて何品か買い求めたが、ユーザーが少なかったためか、何年間かで廃止が決まってしまった。復活を求める声も大きくあると聞かすが、まだ復活のニュースは届いていない。とても残念でならない。

納豆にしても、左利きグッズにしても、販売の対象は“万人向け”ではない。でもターゲットはとても明かだ。メッセージもはっきりしている。ある意味、私のように飛びついてくる存在は、そんなにはいないのかもしれない。物好きな人間は少数派なのかもしれない。でも、私が思うに、こういう企画は、少数ながらも確実に顧客を得ることに成功しているのではないか。私たちがこれからのビジネスや事業を考える時、誰に、どんなサービスを提供するのか、それをどうアピールするのか、をもっと明確に、綿密に、丁寧に考えていかなければいけないと感じている。

さて、e-dream-s は、3 月末にアメリカのチャータースクールを訪問する。事前学習も始まっているが、公立学校の“失敗”の中で生まれてきたチャータースクールの制度は、創設者が、

¹¹ FELISSIMO (フェリシモ) : 神戸にある通販会社。この春から、兵庫県、神戸市、社会福祉法人プロップ・ステーションと組んで、障害者の作業所や授産施設などで制作される商品の品質向上と通販という販路の確保を目的にした「チャレンジド・クリエイティブ・プロジェクト」を始めるなど、ユニークな経営を行っている。

どんな生徒の層に、どんな教育を提供するのか、どんな効果が期待できるのか、などを文書で提出し、認可されると、税金を使って開校できる。ただ、決められた期間内に成果がでなければ閉校やむなし、という厳しい措置もある。とてもNPO的だなあと思う。訪問して、教育やカリキュラムなどについて、創設者や教師、生徒、親、その地域に住む人々に聞いてみたいことがたくさんある。加えて、それと同時に、学校運営についてもたくさんの情報を得てきたいなと思っている。とても楽しみである。まだ迷っている皆さん、一緒に行きませんか！

カメルーン教育事情 (その1)

e-dream-s 理事 山田昌子

カメルーンの朝は、熱帯にもかかわらず、爽やかだった。海沿いの街リンベの風は心地よく、昼間の蒸し暑さとは比較にならなかった。リンベはホテルのプライベートビーチも多く、むしろリゾート地。前夜連れて行ってもらったナイトクラブは観光客が多く、価格が高いせいか、酒場を感じさせないような洗練された雰囲気があった。カメルーンの西部のこの辺りは、過去にイギリスの植民地であった影響で、英語圏である。カメルーンの人口 1,500 万人に対し、英語圏には 200 万人しか居住していないので、英語は公用語ではあるが、マイノリティの言葉といえる。首都ヤウンデなどでは、共通言語としてはフランス語が主流だ。

カメルーンでは多くの人々にお世話になった。カメルーン人の友人を頼ってやって来たが、彼の妻の弟の知り合い（アサファーさん）が学校を紹介してくれた。彼女はパソコン関係の仕事をしていて、パソコン教室も経営している。グラフィクスでTシャツを作り、学校の体育の運動着として販売、その関係で、校長に頼み込み、私たちの訪問が可能になった。カメルーンの家族は大家族が多く、家族や近所の知り合いを大切にする。村のように人と人の関わりが濃厚、親切にして下さる人が多かった。が、アサファーさんによると、特にリンベはそれ程開かれた社会ではなく、むしろ見知らぬ人を排除する街だという。とすると、アサファーさんは特別、彼女と出合った私達はラッキーだ。

日本で言う冬休みにもかかわらず、Government High School Limbe の校長はにこやかに私達

を出迎えてくれた。カメルーン英語を理解できるやろかと密かに心配していた私は、彼女の笑顔に包まれ、ほっとした。まず、カメルーンの教育制度の基本的事項から教えていただくことにした。

pre-nursery school : 2 (1.5 も) ~ 3 歳
 nursery school : 4 ~ 5 歳
 primary school (無料) : 6 ~ 11 歳

↓

↓

secondary school : 12 ~ 17 歳
↓
high school : 18 ~ 19 歳

technical school (職業科)

↓

↓

university

specialized school

日本の中学校、高校にあてはまる学校は、カメルーンでは、secondary school level と high school level 両方の生徒が通っている学校で、一般に学校の種類は3つ。①フランス語を使う学校、②英語を使う学校、③フランス語・英語の両方を使う学校（但し教員や教科により割合は異なる）だ。

Government High School Limbe は、Bilingual の公立の学校である。全校生徒 2,144 名。GC (Grammar Certificate of Education) の ordinary コースの生徒は約 1,500 名、advanced コースの生徒は約 600 名。イギリスやフランスに倣い、全国の試験 GC で一定レベル以上の得点を取らなければこれらのコースには進めない。教員 84 名を含む全スタッフは 100 名位。日本の基準を当てはめて考えるなら、生徒数にしてはスタッフの数は少ない。平均して 1 クラスの生徒数は 70 名というから驚きだ。休暇中にもかかわらず特別授業を行っていたので訪れたが、日本の一般の教室より少し大きい位の部屋に 70 名の生徒たちが着席していた。日本の生徒よりも身体が大きいので窮屈そうだが、実に静か。入室して、英語で自己紹介少し話すと笑顔が見られた。日本の生徒との e-メール交流のアイデアに関心を寄せているのが感じられた。が、授業が再開されると緊張したムードに変わった。先生が厳しいのかな。見にくい黒板を一生懸命見てノートに書いている生徒たち。熱心に先生の言葉に耳を傾けていた。その他、いくつかの教室、体育館で勉強している生徒たちに出会った。休みなで制服を着ている生徒は少なかったが、教科書やボールペンを持って友達と教えあったりして一生懸命学んでいる姿が印象的だった。さすがに英語圏、生徒に声をかけても英語が通じたのが

嬉しかった。

私達は、リンベの後、首都ヤウンデで、4校（公立・私立）訪問した。それぞれ特徴があるものの、総じて学校の設備は決して良いとは言えない。電灯がない、電灯線が繋がっていない、電灯があっても数が少なく薄暗い。図書館の本は少ない。理科室などの特別教室はほとんどないと言っても過言ではない。首都ヤウンデの私立学校の College Prive Laic Fleming で、やっとそれらしいものを見つけたが、顕微鏡はたったの3台、試験管やピーカーも数個、パソコンは1台しかなかった。technical school（職業科の学校）である私立学校の Institut des Techniques Industrielles d'Etoug-Ebe (ITIE)ですら、生徒数1,517名に対してパソコンや足踏みミシンは10台位しかなく、調理室の鍋なども全く不足していると言えなかった。どこの学校も、黒板やチョークは質が悪く、書きにくく、また読みにくかった。が、さすがに熱帯、木材は豊富なのか、痛んでいるとはいえ机や椅子は沢山あった。

ITIEで「一番の学校の問題は何ですか？」と尋ねた。生徒の躰の問題、生徒のドロップアウトの問題、卒業後就職先がないという問題、教員研修の問題、教員数の不足の問題・・・私の頭の中にいろいろな問題が浮かんだが、校長の返事は“Lack of materials”であった。グループ活動を適宜取り入れているというが、1グループ（15－20名）あたりの教材が少ないので活動が十分できない。生徒は興味を持続させられないし学習に集中もできない。教科書ですら4名の生徒で一緒に使用しなければいけない現状。何年にも渡って教材を共有するので、教材も段々消耗していく。新しい教材を購入することも出来ない。校長はもっといい環境で教育を行いたいというのだ。それでも先立つものが十分なく、見通しは暗い。

実際、primary school までは無料だが、secondary school 以降は保護者が支払わなければいけない。お金がなければ入学は不可能だし、途中退学も多い。例えば、Government High School Biyem-Assi で、途中退学は20%位だと言う。制服や教科書代等、最低でも年間1万 CFA フラン（2,000 円位）必要だ。カソリックなど私立になると、3万 CFA フラン（6,000 円位）要る。例えば、50 cm 位のバケツが 150 CFA フラン（30 円位）、鯛の缶詰め 300 CFA フラン（60 円位）、タクシー基本料金 250 CFA フラン（50 円位）という物価、そして子沢山の家庭を考えると、1万 CFA フランは多額だ。お金がある者は学校に行ける。私立学校にも行ける。その私立学校でも設備が十分とは言えない。

カメルーンの友人によると、経済危機のため公立学校の教員の月給は徐々に下がり一時は 6万 3,000 CFA フラン（12,600 円位）となったが、サイドジョブを持っていても暮らしていけ

ず勤務にも差し障りが生じたので、現在は15万CFAフラン(3万円位)となっているらしい。私立の学校はもう少し給料がよく、安定しているので、仕事が大変でもやめる教員は少ないようだ。教員のみならず、給料だけでは生活できないので、サイドジョブを持つのが一般的だそうだ。驚いたことに、外交官である友人もまたサイドジョブを持ち、外交官になるために取得しなければいけなかったPh.D.を利用し大学で教えていると言う。

勉強したいという「やる気」や「熱意」があっても、報われないシステムになっているところに、救いが見られないと私は感じた。その中で、休暇中にもかかわらず、学校へ来て真剣に勉強をしている生徒たち、そして「大変だけど、頑張っていますよ!」と言う先生方の、温かい笑顔が、忘れられない。

↓ Government High School Limbe の自主学習をしにやって来た生徒たち



Government High School Limbe の特別授業 (中央はアサファーさん) ↑



←Government High School Limbe の校長と中川さん (中央はアサファーさん)



↑ College Prive Laic Fleming の図書室と案内してくれた先生

今日の朝、「e-dream-s のホームページのカメルーンツアーや、e-dream-s 通信を読んだ」という高松のサラリーマンの方から電話がありました。彼の友人が1年間カメルーンで勤務するので、カメルーンについて調べているのだということです。いろいろな人が見てくれているのだなあと、うれしくなりました。「次号も楽しみにしています」という声を聞き、原稿を書こうという元気ができました。(山田昌子)

「カメルーンの学生と e-メール交流をしませんか」

(募集のその後 Part 1)

「先生、カメルーンの私のペンフレンド、26歳やって。びっくりやわ。」

英語の授業で、パソコン画面を見ていた私のクラスの女生徒が、言いました。カメルーンでは、経済的にセカンダリースクールに行けない、又は続けられない生徒が多く、条件が揃えば年齢にかかわらず入学できるようです。私がカメルーンに滞在中お世話になった、ホストファミリーの奥さんは、幼い子供2人をかかえています、セカンダリースクールでの勉学を希望されているようです(旦那さんが2月から南アフリカでの赴任が決まり実現しませんでした)。

ところ変われば品変わる。異文化交流で感じる驚き、そして面白さ、その体験が、e-メール

交流で出来る時代になったのだなあと感じます。

先月号の「カメルーンのセカンダリースクールの生徒と e-メール交流をしませんか」とご案内いたしましたところ、多くのご希望を寄せていただき、ありがとうございました。1月31日の締め切り以降に日本からのご希望が増え、現在カメルーンの学生に問い合わせをしているところです。では、途中経過ですが、決定し e-メール交流をスタートされている方々について、ご報告します。

<リンベの学校>

(あ) Government High School Limbe (1名)

* 京都府立城陽高校 2年生女子

<首都ヤウンデの学校>

(い) Government High School Biyem-Assi (2名)

* 大阪府立吹田高校 3年生女子

* 京都府立城陽高校 2年生女子

(う) MEVICK Bilingual College (2名)

* 京都府立城陽高校 2年生女子

* 関西外国語大学短大生女子 (京都府立城陽高校卒業生)

※現在希望があるが、問い合わせ中

(カメルーン) 2名

(日本) * 甲南高校 2年生男子 1名

* 小倉南高校女子 4名

* 青山短期大学生女子 (京都府立城陽高校卒業生) 1名

カメルーンのインターネット事情は、日本とは全く異なり、ほとんどの人がインターネットカフェに行かないと e-メールが出来ないようです (また、私はインターネットカフェから e-メールを送った経験から、画像を送るのは控えた方がいいと思います)。従って、これを見ると思ったよりも向こうからの希望が少ないように見えますが、今後、さらに e-メール交流希望が出て来る可能性もあると思います。その際は、また案内をさせていただきたいと思えます。

このように、e-dream-s が、異文化交流、中でもカメルーンと日本の友好関係に少しでも貢献できるとうれしいです。今後共、どうぞよろしく申し上げます。